

○ 今井悦子

(放送大)

目的 日本人は、家庭内で日常的に使われる食器において、常に特定の個人に属する食器、すなわち属人器をもつ。近年食器の属人性は崩れてきているといわれるが、実態は明らかでない。そこで実態を明らかにすると同時に、属人性に対する意識や家庭の食卓風景との関係を探ることを目的として調査を行った。

方法 2000年5月、放送大学の学生 2,500 名に対し郵送調査法によってアンケート調査を行った。内容は、家族構成、食器の専有・共有状況と共有への抵抗感、配膳方法、食事マナーおよび食生活状況・意識などとした。結果の解析には SPSS を用い、 χ^2 検定および CHAID を行った。

結果 回収率は44%であった。回答者の中に1人世帯が 5.7 %あり、これを除いて以下の分析を行った。専有率が高い食器は、箸88.0 %、飯茶碗83.6 %、湯のみ79.7 %であり、汁物椀は46.1 %、また取り皿は 7.8 %と著しく低かった。その他として34.8 %がマグカップを属人器としてあげた。食器を共有することに対する抵抗感がある者は、箸 50.0 %、湯のみ 39.2 %、飯茶碗35.1 %、汁物椀23.7 %、取り皿 5.4 %であり、抵抗感あり・なしと家族人数の間には有意差はなかったが、性別では女性にありが多かった。箸の専有がもっとも高いグループは、飯茶碗と湯のみも専有しており、箸の共有に抵抗感のある人々であった。箸の共有に抵抗感をもつのが高いグループは、湯のみと飯茶碗の共有にも抵抗感があり、汁物椀を専有としている人々であった。